



No.14 2000.4.

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目次

土木史ニュース	大谷川橋梁の保存	阿部 英彦	1
フォーラム	市民運動で実現したトラス橋の里帰り	今 尚之	1
地域のニュース	世界遺産と土木文化財	西村 幸夫	2
	京都府大山崎町にて煉瓦造2連式樋管が出土	田中 尚人	3
	板谷峠トンネルの排煙用煙突	粟野 宏	3
海外土木史	歴史的構造物を現代に活かす	鈴木 圭	4
関連学会ニュース	日本科学技術史学会の活動	高橋 雄造	5
学会の動き	第20回土木史研究発表会		5
行事案内	平成12年度千葉県立美術館・博物館合同企画展		7
	産業遺産保存に関するミレニアム国際会議	五十畑 弘	7
	第4回土木の文化財を考える講演と討論の会		8
土木史関係図書	『日本の川をよみがえらせた技師デ・レイケ』他	吉村 伸一	8

土木史ニュース

大谷川橋梁の保存

東武鉄道が今市近郊で大谷川(だいやがわ)を渡る橋梁は、2連のトラス橋と8連のプレートガーダー橋から成っていたが、いずれも径間30.48m(100ft)である。特に2連のトラス橋の歴史は古く、1884(明治17)年に、北海道開拓使の顧問技師であったJ.U.Crawfordが旧幌内鉄道建設のために米国Cofrode & Saylor社に発注し、翌年岩見沢市内の旧幌向川と旧幾春別川に架けられた。1917(大正17)年には栃木県の下野軌道(株)(現東武鉄道)が当時の鉄道院と契約し、これら2連と九州から8連のトラス橋を購入し、1919(大正19)年に大谷川に移設した。移設以来76年間、北海道時代を含めると1996年の取替えまで、実に114年間働き通したことになる。国鉄が英米独などから多量に輸入したトラス橋より更に古い構造が随所に見られ、大変興味深い。



移設を待つ大谷川橋梁

撤去に際し、この貴重な橋を保存することになり、その一連は昨年JR東海の三島研修センターに移設、復元され、歴史の保存と共に教材として活用されている。もう一連は生まれ故郷である北海道の岩見沢市に引取られ、再築を待っている。

(足利工業大学 阿部 英彦)

市民運動で実現したトラス橋の里帰り

1995(平成7)年架け替えを前に、大谷川橋梁の歴史的価値を見出した研究者や土木技術者らによる、北海道への里帰りの働きかけが始まりとなった岩見沢の里帰り市民運動は、北海道一の鉄道のまちという地域の記憶(原風景)を継承したまちづくりを展開する市民グループ「岩見沢の鉄道復興を考える会」が中心となり、まちづくり活動の一環として取り組まれてきた。

しかし、現実には「トラス橋とはいったい何か?」「現物が目の前にあるわけではないので、いまひとつ実感が湧かない」など、多くの市民にとってなじみが無いという問題が存在し

た。そのようなハンディの中、自らが主催するまちづくり楽耕、まちづくりコンサートなどのイベントや、どか雪祭りなどの市民行事、さらにマスコミを通じて大谷川橋梁の里帰りの意義と運動への参画を訴え続けた。その結果、1999年夏に全市的な「トラス橋の復活を進める会」が結成され、同年10月18日、予定より2年遅れた部材の里帰りが実現した。

今後3年間を目標とした、市民一人ひとりの参画による手づくりの再築活動が、雪解けを待って始まる場所である。

(北海道教育大学 今 尚之)

世界遺産と土木文化財



西村 幸夫
(東京大学都市工学科教授)

世界遺産とは1972年の第17回ユネスコ総会において採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(世界遺産条約)において定められた優れて普遍的価値を有する文化財や自然環境に関して定められたリストに登載されている遺産であることはよく知られている。世界遺産は文化遺産と自然遺産、そして両者の複合である複合遺産から成っている。文化遺産の登録基準は6点で、人間の創造的才能を現す傑作、ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に大きな影響を与えた人間的価値の交流を示すもの、現存する、あるいはすでに消滅してしまった文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは稀な証拠、人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的又は技術的な集合体、あるいは景観に関するすぐれた見本、ある文化(又は複数の文化)を特徴づけるような人類の伝統的集落や土地利用の一例、顕著で普遍的な価値を持つ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接又は実質的関連があること、となっている。このうち は例外的な場合にのみ適用し、さらに単独で用いないこととされている。

このクライテリアが示しているように、世界文化遺産は、通常考えられている以上に間口が広く、さらに近年、新たな視点において遺産を評価し直すことが盛んにおこなわれるようになってきた。こうした傾向のもとに、文化的景観(カルチュラル・ランドスケープ)や文化的巡礼路(カルチュラル・ルート)、無形の文化的伝統などがクローズアップされてきている。

土木文化財の「発見」もこの流れの中にある。古代の水道橋などの事例以外に近代的な産業遺産や土木構造物が世界遺産としてノミネートされるようになったのは1990

年代に入ってからで、もっとも初期のものとして、スウェーデンのエンゲルスバーリの製鉄所(93年)、ドイツのフェルクリンゲン製鉄所(94年)などがあり、近年では97年登録のキンデルダイク-エルスハウトの風車群(オランダ)や翌98年登録のセンメリング鉄道(オーストリア)、D・F・ウォーダ蒸気水揚げポンプ場(オランダ)、ベルギーの中央運河にかかる4基の船舶用水力式リフトとその周辺などがある。

こうしたクローズアップの背景には、産業考古学の発展と世界的な定着があるが、ヨーロッパにおける古典的な世界遺産の登録が一段落し、世界遺産登録の次なる新たな論理を先進諸国が探索しつつあるという事情が反映しているように感じられる。

これに一石を投じたのが最も新しい99年12月登録のインドのダーズリン・ヒマラヤ鉄道である。これは発展途上国において登録された初の土木文化財であると同時に、植民地の科学技術を正面から捉えた初の世界遺産であるといえる。ヒマラヤ鉄道のように産業革命初期の科学技術が途上国故に現在まで現役で、かつ大規模な改変を被ることなく生き延びることが可能であったため、その結果として文化遺産として高く評価されるに至るという例も生まれてきているのである。

世界遺産における土木文化財の位置づけの問題はようやく意識され始めてきたところであるといえよう。

地 域 の ニ ュ ース

京都府大山崎町にて煉瓦造2連式樋管が出土

建設省近畿地方建設局淀川工事事務と京都府乙訓郡大山崎町教育委員会は平成11年12月9日、同町大山崎の桂川右岸高水敷で、雨水や生活排水などを桂川に放水するため明治期に築造された煉瓦造2連式樋管が発見された、と発表した。発見は「淀川流水保全水路整備事業」の工事中、11月25日に偶然のことであった。

樋管は長さ約25m、水路部の内のは高さ約1.5m、幅1.48mで二本の水路が桂川に直角に掘られていた。構造は赤煉瓦(22×11×6cm)のイギリス積み、水路部の床面には煉瓦が斜めに敷き詰められており、上部には一間ものの石蓋があったと推測される。その下にコンクリートの基礎が約60cm置かれ、さらに直径18cmの丸太杭が、地下約3.5m程の深さまで50～60cmの間隔で埋められていた。水路の先端には、軸受けの石が見られ、川からの逆流を防ぐための扉が存在していたようである。

天王山と桂川に挟まれ、昔から水はけの悪かった同町では、桂川に堤内の不要な水を排水する必要があった。建設省近畿地方建設局淀川資料館によると、この辺りには豊臣秀吉が毛利家に造らせた文祿堤とも呼ばれる堤防が存在し、明治20年から44年にかけて(当地区は明治34年)改良工事が行われたという。

大山崎町史には「一九〇〇年(明治三十三年)十二

月、大山崎村、煉瓦造による悪水路・樋管改造を京都府へ願い出る[大山崎村長工事施工願書控]の記述が見られ、堤防増補工事に伴い補助金が申請され、その翌年に完成した記録が残っている。また「悪水煉瓦造樋管長八拾壹尺 内法高四尺九寸貳分 横四尺八寸 貳連 壹ヶ所」の記述もあり、出土した樋管はほぼ原型を留めていることになる。樋管は、昭和2(1927)年の新堤防造成時に廃棄されたと推測される。

淀川水系において明治期の土木構造物がほぼ完全な形を留め発見された事例は珍しく、史料通りの姿を見せたことに関係者は歴史的な価値を見出したが、樋管自体は実測及び写真測量を行い図面を作成した後撤去、一部が淀川資料館に収蔵された。

(京都大学 田中 尚人)



出土したレンガ造2連式樋管

板谷峠トンネルの排煙用煙突

- 開通100周年を迎えた奥羽本線板谷峠の土木遺産 -

道路トンネルには換気孔が備えられているのが普通だが、鉄道トンネルではそういうのは珍しいのではあるまいか? 写真の煙突は、奥羽本線の板谷～峠間の板谷峠トンネルの排煙用煙突である。高さ約6m、直径約2mの煉瓦造りの巨大な煙突は、山林の中に立っていて、近くの道路からすぐその存在に気づく。

この煙突は、下を走る奥羽本線の板谷峠トンネルに通じている。地図をひらくと、この煙突が立っている地点は海拔約720m。一方、トンネルは海拔約620m(西側の出口に位置する峠駅は622mである)。その差は実に100mである。

奥羽本線の福島～米沢間が開通したのは、明治32(1899)年5月15日。昨年、節目の100周年を迎えたところである。この鉄道は、日本でも屈指の難所板谷峠を越える。沿線には、苦難の歴史をいまに伝えるさまざまな土木遺産が現存する。赤岩・板谷・峠・大沢4駅のスイッチバック遺構(スイッチバックは1990年に廃止されている)赤岩駅近くの松川橋梁、長さ約1,600mの板谷峠トンネルなどが特に重要である。

この煙突の深さ約100mもの立坑は、板谷峠トンネルを建設するさいに掘られたものらしい。「らしい」というのは、まだ調査不十分のために確証がないからだが、建設のときに立坑を掘ったという記録が残っている。

それらの鉄道遺産を保存するための制度的保証

は、いまのところない(しかもこの煙突は、その存在さえ地元でもあまり知られていない)。峠駅では、1997年に駅本屋が、翌98年には煉瓦造りの危険品庫が、惜しまれながら取り壊された。そして、今年2000年1月には、旧米沢機関区に残っていた転車台が取り壊された。だが、市民団体や学会など少なからぬ人びとが、現存する鉄道遺産の保存・活用を求めてさまざまな取り組みをはじめている(註)。

註)開通100周年にあたる昨年5月、筆者らは、それらの鉄道遺産についてのシンポジウムを開催した。報告論文集の残部があるので、希望される方には実費(送料込910円)でお頒けしたい。

(山形大学 粟野 宏)

問い合わせ:

〒992-8510

米沢市城南4-3-16

山形大学工学部

粟野 宏

TEL:0238-26-3046



板谷峠トンネルの排煙用煙突

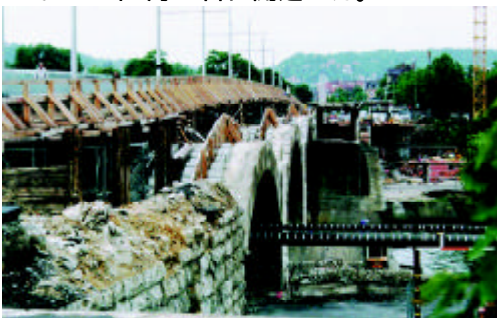
歴史的橋梁を現代に活かす - ドイツの現位置保存への取組み -

歴史的な橋梁が現代の交通量の増大や河川構造令に適應しないという理由で、移設や取壊しとなった事例を見かけることがある。現位置保存となると保存・活用方法や技術的な対策について様々な問題を解決しなくてはならない。1 昨年、ドイツの各都市において、19世紀に建設された歴史的橋梁を現位置保存の状態に現代に活かす様々な工夫がなされている状況に出会った。

1. 石橋の復活 - ビュルツブルグ -

ビュルツブルグでは、1888（明治21）年にマイン川に建設された7径間の石橋、ライトポルト橋（現フリーデンス橋、アーチスパン28m、幅員10.65m）を現位置に保存し、現在の交通量の増大に対応させるために、交通の流れを遮断することなく幅員を25mに拡幅する工事が進行していた。1960（昭和35）年にも鉄筋コンクリートアーチ橋を下流側に併設し、幅員を18.65mに拡幅したが、路面電車と乗用車の併走による渋滞は避けられず、1997年に車道と軌道を分離させるに当たって、コンクリート橋を撤去し、石橋のファサードを復活させることになった。技術的な解決策として、上流側は旧橋の橋脚、アーチ、ファサードを保存し、その上に路面電車用のPC（プレストレストコンクリート）橋を架設した。また、下流側は橋脚、アーチを新設し、車道用のPC桁を架設後、ファサードを石積みとすることによって、上流側の石橋のアーチのイメージを復活させた。

現代の技術と知恵によって、このような石橋も取り壊すことなく増大する交通量に対応させることができる。最も重要な点は、ビュルツブルグ市当局が将来の都市計画と絡めて歴史的構造物の保全と活用に積極的に取り組んでいることである。新橋はフリーデンス橋（自由の橋）として1999年9月10日に開通した。



石橋の復活を目指したフリーデンス橋

2. 鉄橋の再建 - フランクフルト -

フランクフルトにも歴史的な鋼橋を再建して供用している橋が2橋ある。オーバーマイン橋は、1877（明治10）年、フランクフルトの若きエンジニア、シュミット（Schmitt）の設計によりマイン川を渡る5径間の鋼製上路式トラス

アーチ（アーチスパン最大36.8m）が架けられたが、近年拡幅されて路面電車併用の4車線の道路橋となった。拡幅時の問題点は、古い鉄橋では現代の荷重に耐えられないため、どのようにして鉄橋を保存するかということであった。その解決策として、PC1室箱桁橋を2列に並べ、路面電車や車等の重い荷重はすべてこの橋に負担させ、その両外側の歩道部にクラシックな鋼製上路式トラスアーチを復活させた。遠景から見るとクラシックな鋼製アーチと桜色の自然石を使った床版や地覆のモダンなデザインが調和し、好ましいデザインになっている。



歩道部に鉄橋が再生したオーバーマイン橋

3. 保存にかける心意気 - フランクフルト -

アイゼルナー橋も、1869（明治2）年にSchmittの設計によって完成した鑄鉄の吊り橋型トラス橋である。1911（明治44）年、マイン川の改修に伴い、船運の便を図るため橋長を延長し、桁のレベルを上げる改築を行った。しかし、1945年3月、ドイツ軍撤退の際に戦略上の理由から自ら橋を破壊した。ここで、鉄橋の歴史は止まったかに思えたが、1946年に全く同じ形の鉄橋を再建した。さらに、1969年、1993年の修復を経て、古き良き時代の姿を今に伝えている。これほどまでに、鉄橋を守ろうとさせたものは何だったのか。エンジニアの誇りのためであるなら131年の存続はおぼつかない。このアイゼルナー橋の橋詰め部にはエレベーターや駐輪場が整備され、市民に使い易い歩道橋として開放されている。この徹底した歴史的構造物の保存と活用は、時代を超えた市民の心意気として讃えるべきものがある。

アイゼルナー橋
(鹿島建設 鈴木 圭)

 関 連 学 会 ニ ュ ー ス

実証研究と隣接分野との交流を求めて

- 日本科学技術史学会の活動 -

日本科学技術史学会は、1997年にスタートした新しい学会です。設立趣旨は、おおよそ次の通りです。

1. 科学技術史研究は、その対象が科学技術であることが特色であるとしても、基本的には歴史研究の一環を構成するので、歴史研究の手法によって行われるべきである。
2. 科学技術史研究は、他の歴史研究領域から孤立することなく、社会、文化、思想、経済、政治などの歴史研究と積極的に交流すべきである。
3. 以上の要請に対応するため、史料探索及び厳密な史料批判による研究水準の向上をねらうとともに、異分野との協力、萌芽的研究・若手研究者およびベテラン科学者技術者による研究の促進をはかる。

会誌『科学技術史』は紙数の上限を設けずに、100枚（400字詰め換算）を大幅にこえる寄稿も歓迎します。今までに会誌を3号、ニュースレターを6号まで発刊いたしました。会誌第3号には大学院生の論文2編が掲載されています。上記のように実証研究と、隣接分野との交流に力

を入れ、2回開催された年会と計9回の研究会では、精神医学者・外国人研究者・官庁関係政策家・ベテラン技術者・アマチュア歴史家・博物館およびアーカイブス関係者などの講演がありました。

会長は鎌谷親善（東洋大学）、副会長は西尾成子（日本大学）です。年会費は5千円、入会金3千円（学生は1千円）、会誌だけの購読会員は1冊につき3千円です。海外の学会との交流にもつとめており、米国技術史学会（SHOT）、国際技術史委員会（ICOHTEC）、米国電気電子学会（IEEE）の電気技術史センターのそれぞれのニュースレターに当学会が紹介されました。土木史関係の方々に、積極的な御加入と交流を希望します。入会連絡先は、次の通りです。

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1
 東京大学大学院 科学史・科学哲学研究室
 岡本拓司 気付 日本科学技術史学会
 電話：03-5454-6694、Fax：03-5454-6978

（東京農工大学 高橋 雄造）

 学 会 の 動 き

第20回土木史研究発表会

土木史研究委員会（委員長：大熊 孝・新潟大学教授）では、下記要領にて第20回土木史研究発表会を開催いたします。多数の方々のご参加をお待ちしております。

1. 主催：土木学会（担当：土木史研究委員会）
2. 期日：2000年6月10日（土）～11日（日）
3. 会場：東京大学工学部1号館
 （東京都文京区本郷7-3-1）
 交通アクセス：営団地下鉄南北線「東大前駅」下車徒歩5分、丸の内線「本郷三丁目駅」下車徒歩10分、千代田線「根津駅」下車徒歩10分
4. 参加費：会員、非会員：2,000円
 学生会員：1,000円
 当日会場にて申し受けます。
5. 第20回土木史研究発表会記念特別講演会：
 日時：2000年6月10日（土）16：00～17：30
 会場：東京大学工学部1号館15号講義室
 講師：1）武部 健一（道路文化研究所理事長）
 2）エリック パウアー（ドイツマールブルグ大学日本研究センター長）予定
6. 懇親会：
 日時：2000年6月10日（土）18：00～

会場：山上会館（東京大学構内）

参加費：3,000円程度を予定

参加方法：当日会場にてお申し込み下さい。

7. 論文集「土木史研究20」事前販売のお知らせ：
 発表会当日の議論をより活性化することを主たる目的として、発表会開催前に、論文集「土木史研究」（4月末発行予定）を販売致します。ご希望の方はFAXまたはE-mailにて、「氏名、送付先（〒、住所、所属名、TEL）、購入部数、支払方法」を明記の上、下記あてお申し込みください。なお、論文集は1冊6,000円（+送料740円）です。

申込先：土木学会土木史研究委員会（担当：丸畑）
 FAX：03-5379-0125

E-mail：maruhata@jsce.or.jp

申込締切：2000年5月20日（金）着分まで

8. プログラム：プログラムは2月末時点のもので、発表会当日のものとは異なる場合があります。

また、土木史研究委員会ホームページでもご覧になれます。

<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce>

第20回土木史研究発表会プログラム

6月10日(土)		
時間	第1会場	第2会場
9:30	開会挨拶 土木史研究委員会委員長 大熊 孝	
9:40	討議】 司会 為国 孝敏(足利工大)	土木一般】 司会 伊東 孝(白大理工)
	49 ギザの三大ピラミッドに見る勾配の考え方の変化について 岩崎 宏	2 足利織物業の工場制機械工業化の変遷とその影響に関する一考 福島 二郎(足利工大) 為国 孝敏 中川 三朗
	50 土木の語義の歴史の変遷に関する再検討 藤田 龍之(白大工)	19 八郎潟干拓事業の成立過程の変遷について 小林 智仁(白大工院) 藤田 龍之 知野 泰明
	教育】 司会 為国 孝敏(足利工大)	
	1 旧制官立専門学校における中級土木技術者教育 原口 征人(北大) 日野 智 今 尚之 佐藤 馨一	20 WWWを利用した建築土木分野の歴史的構造物のデータベース構築について 草間 晴幸(阪大) 草間 晴幸 矢田 直之 笹田 剛史
	16 初心土木技術者への忠告 - 明治期 坂玉社土木同窓会誌の記述から - 榎山 清人(全国建設研修センター) 安孫子 義昭 長谷川 博	21 土木技術者人材データベースの試み 佐々木 葉(日本福祉大)
	17 土木の絵本シリーズに見る小学校アンケート調査からの考察 - 土木史を義務教育 総合的な学習の時間」に組み込むために - 緒方 英樹(全国建設研修センター)	22 電力土木の歴史 - 第2編電力土木人物史(その8) 稲松 敏夫(稲松技術士センター)
	18 古典の探索と土木の未来 吉原 不二枝	
11:25	都市】 司会 加藤 仁美(東海大) 佐々木 葉(日本福祉大)	近世以前】 司会 知野 泰明(白大工) 大熊 孝(新潟大)
12:40	3 共同溝にみる道路占用物から道路附属物への転換 鈴木 悦朗(服部エンジニア 株))	7 金廻四間門樋について 島崎 武雄(林地域開発研究所) 佐藤 久則 中村 義秋 高橋 悦子
	4 明治期の神戸における市街地整備事業に係る地権者間の契約書の成立と変遷に関する研究 小原 啓司	8 「玉川上水留」にみる幕末期の江戸における玉川上水の木工構造認識と設計法 神吉 和夫(神戸大)
	5 州の都市形成過程と都市計画に関する研究 田中 重光(樹林設計)	9 町在 関連資料に見る通潤橋架橋による関係町村への政治 経済的背景と効果について 小林 一郎(熊本大) 石井 清喜 本田 稔寛
	6 ラウンドアバウトの発展と流入部での優先通行権 山田 晴利(建設省土研) 清水 英明	26 辰巳用水が罹災した自然災害 青木 治夫(コスモ工機(株))
	23 社寺空間等の活用形態に関する現況調査 松山 正将(東北工大) 花淵 健一 菊地 清文 佐伯 吉勝	27 まいまいず井戸の開発実態とその特徴について 石川 大輔(日本河川開発調査会) 岩屋 隆夫
	24 鎌倉地方の史的庭園における築造技術に関する研究 石原 彩子(早大)	28 道役についての一考察 篠田 哲昭(北海道建設工業専門学校) 中尾 務
	25 長良川における橋梁空間の歴史性に関する検討 石田 元章(岐阜大院) 秋山 孝正	29 河村瑞賢の研究 増淵 文男(関東学院大) 宮村 忠
15:45		30 条里制に先行した機内の方格地割(その1) - 陰陽を重視した古代の技術 - 坪井 基展(株)建設技術研究所大阪支社 須藤 孝信
16:00	第20回土木史研究発表会記念特別講演】 司会 藤田 龍之(白大工) 講師 武部 健一(道路文化研究所理事長) エリック パウアー - (ドイツマールブルグ大学日本研究センター長) (予定)	
17:30		

6月11日(日)		
時間	第1会場	第2会場
10:00	保存工学】 司会 馬場 俊介(岡山大)	河川治水】 司会 佐藤 馨一(北大)
	10 114年間供用された旧大谷川トラス橋の実態と復元 稲葉 紀昭(株)東京鐵骨橋梁 田中 宏昌 関 雅樹 阿部 英彦 野辺 武	11 デ・レーケの常願寺川改修工事における技術 市川 紀一(株)グロバーテック)
	31 城郭石垣の安定性判定手法 - 実用試案 - 田中 邦熙 新谷 洋二 山田 清臣	12 阿賀野川右岸地区における氾濫許容型治水に関する研究 田辺 敏夫(新潟県土木部) 大熊 孝 中川 武雄
	32 数値評価法を用いた豊臣期大坂城石垣の特徴について 森本 浩行(京都市立伏見工高) 西田 一彦 西形 達明 玉野 富雄 森 毅	36 北上川分水施設の建設史と遺産的価値に関する研究 - 鶴波洗堰、脇谷洗堰を中心に - 知野 泰明(白大工)
	33 阪神間・京阪間鉄道における煉瓦構造物とその特徴 小野田 滋(鉄道総研)	37 近世近代の九頭竜川の治水 安達 實(真柄建設(株)) 五宝外 美雄 蔵谷 来三郎 北浦 勝
	34 琵琶湖疏水インクラインの解体調査と復元方法 伊東 孝(白大理工)	38 甲突川の治水システムと岩永三五郎(2) 北畠 清仁(徳島県島川内土木事務所)
12:05	35 スリ・ランカ国「Old Bridges」の調査 西 陽絵(株)オリエンタルコンサルタンツ)	
13:15	橋梁】 司会 五十畑 弘(NKK) 小西 純一(信州大)	交通】 司会 小野田 滋(鉄道総研) 渡辺 貴介(東工大)
	39 明治末期における京都での鉄筋コンクリート橋 山根 巖(大日コンサルタント(株))	13 港湾運送事業法の免許制に対する評価と海運貨物取扱事業者の経営体制に関する一考察 清野 馨(石狩湾新港管理組合) 堂柿 栄輔 五十嵐 日出夫
	40 山形の石橋 - 明治初期の山形での石拱橋の設計の検討 井上 肇(株)ジャス・コンサルタンツ 市村 幸夫	14 琵琶湖疏水計画における舟運機能に関する研究 田中 尚人(京大) 川崎 雅史
	41 長野県の歴史的橋梁の現況について 小西 純一(信州大) 氷口 正敏 瀬川 俊典	15 冬期間の輸送からみた北海道における駅通制度の存続要因 日野 智 北大院 原口 征人 今 尚之 佐藤 馨一
	42 日本の屋根付き橋の全国調査とその概要 長谷川 英男(白大理工院) 井草 郷太 尾崎 康一 伊東 孝 市古 太郎	46 北九州に創設された小倉鉄道の史的比較 田中 邦博(九州共立大) 市川 紀一 亀田 伸裕
	43 民間の活力を利用した明治期の架橋工事についての研究(常願寺川の貫取り橋、常磐橋の例) 貫堂 敏(佐藤鉄工(株))	47 日本の産業 交通史と土木遺産の関連 樋口 輝久(岡山) 馬場 俊介
	44 奥羽本線板谷峠の土木遺産 - トンネルと橋梁 - 栗野 宏(山形大)	48 これからの交通システム整備と「まちづくり」に関する土木史的考 鈴木 聡士(北海学園大院) 五十嵐 日出夫
15:45	45 長崎の中島川の石橋群について 石崎 勝義(長崎大) 正木 晴彦	
15:55	総括及び閉会挨拶 土木史研究委員会副委員長 渡辺 貴介	

行 事 案 内

平成12年度千葉県立美術館・博物館合同企画展

1. 名称: 「房総ロマン紀行 - 写真で見る産業・交通遺跡展 - 」
2. 主催: 千葉県立現代産業科学館 / 千葉県立中央博物館 / 千葉県立上総博物館 / 千葉県立総南博物館 / 千葉県立関宿城博物館 / 千葉県立房総風土記の丘 / 千葉県立房総のむら / 千葉県立安房博物館 / 千葉県立大利根博物館 / 千葉県立美術館 / さわやかちば県民プラザ (連携)
3. 後援: 文化庁 (予定)
4. 開催主旨: 県立博物館ネットワーク構想に基づき、県立美術館・博物館の効果的な活用を目指し、平成5年度から各館の資料と情報を提供し合いながら合同企画展を開催してきている。平成12年度は、現代産業科学館において調査を進めてきた「千葉県の産業・交通遺跡」を取り上げ、我が県の近代化を押し進めてきた貴重な構造物等を写真パネル中心に紹介する。また、平成2年度より文化庁の補助事業として近代化遺産総合調査が進められ、それぞれの県の近代化遺産の所在が明らかになってきた。そこで、国指定重要文化財および、登録文化財、県指定文化財等の「近代化遺産」についても併せて紹介し、近代化遺産の持つ魅力や価値について考える機会とする。
5. 開催期間 (予定)
- 平成12年8月5日～8月31日:
千葉県立現代産業科学館
- 平成12年9月15日～10月30日:
さわやかちば県民プラザ

平成12年12月12日～平成13年1月14日:

千葉県立上総博物館

平成13年1月24日～2月18日:

千葉県立中央博物館

6. 展示構成:

単元1: 産業・交通遺跡とは?

単元2: ちばの産業・交通遺跡

単元3: 全国の近代化遺産

単元4: 活かして残す

単元5: 産業・交通遺跡メディアセンター

映像: 近代化遺産を訪ねて、近代化遺産を訪ねて、ニッポン近代化遺産の旅、近代化遺産調査報告書、インターネット近代化遺産ホームページ閲覧ほか

7. 関連行事:

(1) 親子のための近代化遺産講座『産業・交通遺跡の見方・楽しみ方』

平成12年8月20日(日)14:00～

小学生にもわかる産業・交通遺跡の見方・楽しみ方を学習します。

(2) 見学会「千葉の近代化遺産」

平成12年10月1日(日) (定員80名)

2台のバスを用いて、千葉県内の近代化遺産の見学会を行います。市川市の現代産業科学館と柏市にある県民プラザから出発します。

8. 問い合わせ・申し込み先:

千葉県立現代産業科学館 学芸課

住所: 市川市鬼高1-1-3 電話: 047-379-2007

産業遺産保存に関するミレニアム国際会議

TICCIH2000; The International Committee for the Conservation of the Industrial Heritage Millennium Congress

TICCIH(産業遺産保存に関する国際会議)は、1973年にイギリスのアイアンブリッジで第1回が開催された。これ以降のTICCIHの27年間の活動は、産業遺産に対する社会の評価の改善と認知の過程でもあった。

今回、ミレニアムを機にTICCIHは、以下のように産業考古学の発祥地のイギリスで大規模な産業遺産に関する国際会議の開催を予定している。

1. 時期: 2000年8月30日(水)-9月7日(木)
2. 場所: ロンドン、インペリアル・カレッジ (South Kensington, London)を主会場とする他ウェールズ、スコットランド、コーンウォールでのツアー、レクチャーがある。(なお、引き続き9月8日より10日までマンチェスターで産業考古学会議(AIA)が開催される予定となっており、これへの引継ぎを兼ねてTICCIH最終日の9月7日はマンチェスターでのレセプションで閉幕する。)
3. 会議内容: 会議は2つの全体セッションと、16の個別セッションに分かれ、全体セッション

のテーマはそれぞれ「18世紀の産業革命」、「大量生産と大量消費、1850—2000」となっている。個別セッションでは、産業遺産保存に関する広範なテーマが取り上げられる。主なテーマを列記すれば、「産業建築物の記録方法」、「産業考古学に関する教育」、「大規模産業遺産の保存と記録」、「産業遺産、産業考古学関連の出版事業」、「歴史的産業機械の動態展示」、「産業遺産地域の再開発」、「産業遺産に関する法的整備」、「世界的産業遺産の指定と管理」、「インターネットによる産業遺産のプロモーション」などである。

4. 言語: 英語。但し、全体セッションは英仏の同時通訳がある。

5. 問い合わせ / 申込み:

TICCIH2000

42 Devonshire Road, Cambridge, CB1 2BL,

United Kingdom

Tel; +44-1223-323437 Fax; +44-1223-460396

E-mail; cc@conferencecontact.co.uk

Website; <http://www.nmsi.ac.uk/researchers/ticcih2000/>

(NKK 五十畑 弘)

行事案内

第4回土木の文化財を考える講演と討論の会

日時:2000年6月24日(土)1:00pm. ~ 4:50pm.
 場所:史跡湯島聖堂内斯文会館講堂 東京都文京区湯島1-4-25 TEL:03-3251-4606
 交通:御茶ノ水駅聖橋口徒歩2分(JR・地下鉄丸の内線・千代田線)聖橋を渡り、階段を下りる。左へ100m左側。土・日・祝は史跡公開です。
 参加費:一般1,000円 学生500円
 司会:前野益子
 13:00 ~ 会長挨拶 東京大学名誉教授 高橋裕
 13:50 ~ 講演「日本の灯台と歴史的灯台の保全」(社)燈光会専務理事 築貫義人
 14:50 ~ 10分休憩

15:00 ~ 講演「白魔に挑む」-海水による消雪道路と八甲田山の春除雪-
 青森県元土木部長 寺坂勝
 青森県前土木部長 奈良豊規
 16:00 ~ 全参加者の討論会(司会:佐々木葉)
 16:50 ~ 閉会
 主催:土木の文化財を考える会(会長:高橋裕)
 連絡先:事務局(前島郁子)
 〒171-0032東京都豊島区雑司ヶ谷1-24-14
 TEL:03-3988-7733 FAX:03-3988-7747
 申込:当日参加可能ですが申込あれば準備に好都合です。

土木史関係図書

日本の川を蘇らせた技師デ・レイケ 著者:上林好之 発行:草思社 定価:2,625円(税込)	今年は、日蘭修好 400 周年にあたる。オランダ人技術者たちが日本の近代河川改修に貢献したことはよく知られているが、本書は、日本にきたエッシャーとデ・レイケとの交友資料を通じて、デ・レイケの生涯を描いたものである。 著者が 90 年にエッシャー家を訪ねて発見したデ・レイケからの手紙や図面、写真などを基にしたものだけに内容はとても新鮮で、57 オからオランダ語を独習し、本書を発行した著者の情熱がしみじみと伝わってくる。 この本は、近代河川改修の歴史的、今日的意味を考える上での好著であり、土木関係者はもとより一般の人たちにも是非読んでもらいたい 1 冊である。
江戸城外堀物語 著者:北原糸子 発行:筑摩書房 (ちくま新書) 定価:693円(税込)	本書は、著者が調査団副団長として関わった地下鉄南北線工事に伴う遺跡発掘調査を基にして、江戸城外堀がなぜ、どのようにしてつくられたかをテーマに書かれている。発掘された石垣と新しく発見された文献史料(柳川藩立花家文書)とつぎあわせて、石垣の構造や当時の施工方法などを明らかにするなど、興味深い本である。著者は、考古学と歴史学の協同研究を本格的にすすめるために、一般向けにこの本を書いたと述べている。土木史研究も学際的な協同を考える必要もあるだろう。
石匠の技 / 福岡県南地方の石橋 著者 / 発行:馬場紘一 定価:2,800円	元建設省九州地建河川部長の馬場紘一さんが福岡県南地方の石橋百橋あまりを訪ね歩きまとめた本を出版した。問い合わせは直接著者に。 Email: kasen-kb@kurume.ktarn.or.jp TEL: 0943-23-0609

(吉村伸一流域計画室 吉村伸一)

編集後記:土木史の文献として優れているにもかかわらず、地方出版であるためあまり知られていない本はないでしょうか。そのような書籍の紹介を是非お待ちしております。連絡は右記事務局まで。もしくは、下記の土木史フォーラムホームページに記載された地域ニュース応募書式にてお送り頂ければ幸いです。

<http://www.city.civil.saitama-u.ac.jp/chsce/obo/obo.html>

土木学会土木史研究委員会監修
 土木史フォーラム No.14
 発行者 土木史フォーラム小委員会
 代表者 窪田 陽一
 事務局 埼玉大学工学部 深堀 清隆
 〒338-8570 埼玉県浦和市下大久保255
 TEL 048-858-9549 / FAX 048-858-7374
 Email: fukahori@post.saitama-u.ac.jp

CONTENTS

- NEWS		
Preservation of Daiyagawa bridge.	ABE Hidehiko	1
A Truss bridge moved to its old hometown by citizens' campaign	KON Naoyuki	1
- FORUM		
World Heritages and heriteges in civil engineering	NISHIMURA Yukio	2
- LOCAL NEWS		
Parallel drain waterway built of brick was excavated in Kyoto.	TANANKA Naoto	3
The smoke extraction funnel of Itaya Toge Tunnel.	AWANO Hiroshi	3
- OVERSEAS NEWS		
Utilization of histrical bridges in Germany.	SUZUKI Kei	4
- RELEVANT INSTITUTIONS		
The History of Science Society of Japan.	TAKAHASHI Yuzo	5
- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering)		
The 20th Conference of CHSCE.		5
- WHAT'S On		
Chiba prefectural art gallery and museum hold an exhibition.		7
The International Conference for the Conservation of the Industrial Heritage.	ISOHATA Hiroshi	7
The 4th forum on heriteges of civil engineering.		8
- BOOK GUIDE		
	YOSHIMURA Shinichi	8